

武家屋敷

松江は江戸時代（1603-1867）の重要な城下町であり、その防衛には武士による大規模な守備隊が必要でした。松江城を囲む地域は、家臣の武士とその家族の居住区として指定されていました。松江には形を変えて現在も残る武家屋敷がいくつかありますが、ある中堅武士のために建てられたこの屋敷は、その中でも特に当時の姿を丁寧に復元したものです。

この屋敷は、松江城の北側の堀に沿って曲がりくねって走る塩見縄手街道沿いに建てられた武家屋敷の一つです。1733年の大火で焼失した後に再建され、その後何度も増改築を重ねてきました。最近まで使用されていましたが、2016年に明治時代の図面や解体中に発見された情報をもとに入念に復元されました。修復作業には3年の歳月がかかりました。

質素さと趣向のショーケース

最下位の武士を除き、通常武家屋敷は屋敷、庭、門、そして付随する離れが壁で囲まれた構造をしており、この武家屋敷もそのような構造になっています。最も多い時には、この敷地内には10人の家族と使用人が住んでいました。武家屋敷の大きさ、建材、および設計上の特徴は、武家の階級に基づいて細かく規制されており、公的に設定された基準を守ることに特別の注意が払われていました。武家は派手さを避けることが期待されていました。この屋敷は、約67坪（220平方メートル）の広さを持ちながらも地味で控えめな外観をしています。今回の復元対象には多くの調度品や家財道具なども含まれ、来訪者が質素な武家の暮らしぶりを想像しやすくなっています。

入口の階層

長屋門と呼ばれる大きな屋根付きの門が、この屋敷の正面玄関となっています。門の構造はかなり大きく、内側には下級武士の家来（中間）3人の生活空間と、当主を乗せるかごの置き場があります。当主の控え目な階級に対応して、門の高さは低く装飾は施されていないものとなっています。また、中庭に面しています。武家屋敷全体に共通する大きな特徴として、入口が階級別になっていることが挙げられます。左側には、当主と当主を訪ねる重要な来客のみが使える格式高い入口があります。薄い木の板の引き戸が2つ、そして幅広い屋根付き玄関と階段があるため、来客は地面に足をつけることなく、かごから降りることができます。

この正式な玄関を抜けると、畳敷きの前庭があり、左側に主人の客室（座敷）があります。正門のすぐ右側には、家族の女性や使用人、親しい友人、親戚などが日常的に

使用するための側玄関があります。この玄関は土間の前庭に通じており、そこから畳敷きの個室に上がるか、同じ階層の右手の土間の厨房に上がることができます。屋敷の背面にある3つ目の玄関からは、厨房に直接出入りできるようになっており、実用的な裏口の役割を果たしています。屋敷全体も同様に区分けされており、格調高い屋敷の前半分は注意深く設計された主庭に面し、家族の居住空間はより堅苦しくない裏庭に面しています。

来客を迎える部屋

座敷は屋敷の中で最上の部屋と考えられており、高位来客を迎えてもてなすのに適した部屋です。このような部屋には、床の間という奥まった装飾用の空間が壁に設けられ、掛け軸、生け花、またはその他の貴重な装飾品が飾られます。当主の刀が飾られる機会もあります。床の間の右には、障子の柔らかな光に照らされた、作り付けの書き物机があります。床の間の左側には、目線の高さに置かれた控えめな飾り棚があり、扉には淡い水墨画で梅の花が描かれています。

この部屋の細部に使われる木材は、厳選された平行木目の杉を使用した上質なもので、床の間の柱には、杉の丸太を一部自然のままに残したものを使用しています。その他の装飾は、木枠に家紋の形をした金属製の釘蓋が数本取り付けられているだけです。座敷と外の主庭は互いを補完するように設計されており、来客が座った際の視点からどう見えるかに大きな注意が払われています。幅広い木製の縁側は、庭への通路であり、同時に広い軒下に座って景色を楽しむ場所でもあります。

機能的な居住空間

屋敷の私的空間は、家族の居住空間と、台所や倉庫など特定の機能空間に分類できます。前者は、屋敷の裏側に長い縁側に沿って一列に並んでおり、裏庭に通じています。これらの部屋には、日中の活動だけでなく、睡眠にも使われると考えられる家族の部屋で、主人の個室、主人の妻のための部屋などがあります。正式な部屋との設計上の違いはわずかですが目立つもので、例えば使われている松の材木の木目に動きがあったり、角が丸められていたり、白い金属でできた遊び心のあるスズメの形の金属装飾があったりします。

機能空間には、日常の仕事をするための畳の部屋と、土間と石の流し台を備えた木の床の台所があります。台所の扉から数歩のところには屋根付きの井戸があり、大きな陶器の水入れは、内と外を半々にして壁にはめ込まれており、外の井戸から簡単に水を入れることができるようになっています。近くに簡素な浴槽があり、水と加熱用の燃料が便利に利用できるようになっています。味噌を入れて発酵させるための小さな

空間も設けられています。屋敷の一番奥には、先祖代々の霊を祀る仏壇の部屋と、二畳の広さの簡単な茶室があります。

長屋門の入り口付近にあった馬小屋は、現代の訪問者に対応するために現代的なトイレに改装され、近くにあった離れは、茶店と土産店に改装されています。